

農作物技術情報 特別号 野生獣対策(2)

発行日 令和6年6月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 基本 つかまえる・まもる・よせつけない 3つの基本対策を総合的に！
- ◆ よせつけない 刈払い等により野生獣にとって快適な環境をできるだけ無くします
- ◆ 電気柵 隙間なく、地面と平行に最下段を設置します
- ◆ センサーカメラ 夜間の自動撮影も可能、獣種を特定し、対策の効果が確認できる有意義なツールです

1 基本

野生獣による農作物被害対策の基本は、「個体群管理＝つかまえる」「侵入防止対策＝まもる」「生息環境管理＝よせつけない」の3つの基本的対策を、地域やほ場で総合的に継続実施することです。

捕獲・駆除だけでは、次の個体群がやってきて、また被害が発生します。捕獲することは基本対策として重要ですが、それだけでは被害を無くすことはできません。3つの基本対策を総合的に実施することが最も重要です。

2 よせつけない＝生息環境管理

●ポイント1 草刈等で近づけさせない！

ほ場や集落付近の茂み、耕作放棄地は、野生獣の格好の潜み場・休憩場となります。

「草を刈る」ことは、見通しを良くすることで、野生獣の姿を見せると同時に、休憩場所を無くすこととなります。また、最大の防御策である「電気柵」の効果もあげることにもつながり、効果的な対策です。

また、車庫や倉庫物置、廃屋、神社仏閣なども点検し、ハクビシン等の住処になっていないか確認します。

また、野生獣を見かけて、そのままにしておくと、どんどんと人慣れが進みますので、人の安全を確保したうえで、追い払いを実施します。



写真1 人間にはゴミでも野生獣には御馳走です

●ポイント2 「エサ場」をなくす！

農作物はもちろんのこと、収穫残さや廃サイレージ、収穫しない果実、生ゴミ、家庭菜園等、身のまわりの思わぬものが野生獣を引き寄せるエサとなります（写真1、2）。

農作物は植えると同時に、食べさせない対策を実施します。

小さな面積であれば、トタン板や電気柵の設置を検討し、野生獣にそこがエサ場だと学習されないよう、圃場や集落、家のまわりの環境を改善します。

3 電気柵は下から潜り込まれないように、大きく囲おう

野生獣は、一度エサ場として認識すると、強引にでも侵入を試みるが多くなるため、電気柵は可能な限り、早く設置します。

設置後は、基本的に、終日通電させます。

電気柵は、効果を最大限発揮させると同時に、人身事故を防ぐためにも、必ず、専用の電牧器（パワーユニット）を使用し、通電時に最低5,000ボルト以上の電圧が確保できるものを選択します（なお、商用電源（AC100V または200V）をそのまま直接「柵線」に通電することは、絶対に行わないでください）。

電牧器を購入後、柵につながらない状態で電圧を測定しておくこと、電圧低下等トラブルの際、原因が速やかに分かります（本体等にマジックペンでメモ書きを推奨します）。

電気柵は下草に触れると漏電し、侵入防止効果が劣りますので、下草刈りはこまめに行うようにして下さい。また、アース棒は地面に対して垂直に、できるだけ深く挿入します。また、アース棒に手で触るとパルスを感じる、または、電圧計で測定し1kVよりも高ければ、アース棒の追加を検討して下さい。

地面が盛り上がったところや、くぼ地には支柱を追加し、電気柵の高さが均一になるよう調整して、漏電や隙間から野生獣の侵入を防ぎます（図1）。

恒久電気柵を長距離設置した場合、図1の★印支柱は強い力で上に引っ張られるので、太い、または、長い支柱を使用します。

これまでは、圃場毎に囲うのが標準的でしたが、長距離に対応している恒久電気柵を利用

し、集落全体を囲ってしまう事例もありますので、電気柵を使う際には地域で相談してください(写真3)。



写真2 多くの野生獣を養っていると思われる柿の木



写真3 集落を囲う恒久電気柵

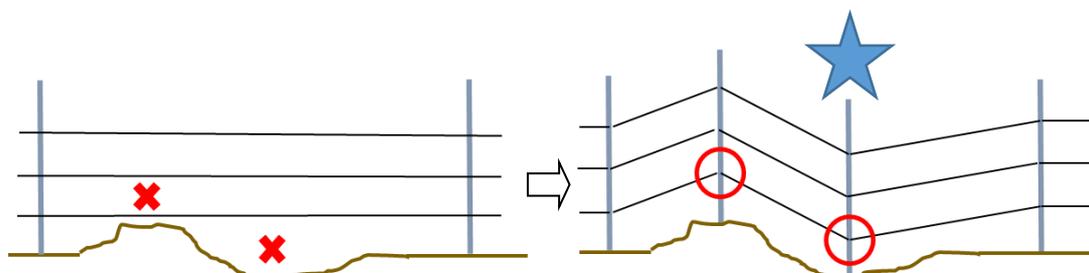


図1 地面の盛り上がり部分やくぼ地には支柱を追加

4 センサーカメラ

センサーカメラ（トレイルカメラ・自動撮影カメラ・野生動物カメラ等）は、動物の熱を感知して自動で撮影するカメラで、無人の状態で「静止画撮影」「動画撮影」「昼夜間撮影」ができます（写真4）。

赤外線センサーを搭載しており、熱（赤外線）を発生する物体（野生獣など）がセンサーのエリア内を移動すると、外気と対象物の温度差を感知して、シャッターが作動して撮影を行うものです。野生獣や人だけでなく、風に揺れる葉や車などにも反応することがあります。センサーのエリア内でも物体が全く動かない場合は感知しません。

野生獣などが全く来なかった場合には、何も撮影しませんので、従来のビデオカメラのように、あとから早送りして全てを確認したりする必要が無いことも特徴です。

野生獣のモニタリングで使用できるよう、頑丈に、また一定の防水機能をもっています。また、乾電池で稼働するので、電源や配線が不要で簡単に設置でき、撮影モードや撮影回数にもよりますが、1か月以上稼働させることも可能です。

センサーカメラは、画像や動画に加え、日時・気温などが同時に記録され、内蔵の「SDカード」などに保存します。また、撮影した画像をメール送信してパソコン・スマートフォンでリアルタイムに確認が出来る通信タイプもあります。

野生獣対策では、被害を発生させている獣の種類を特定することが重要です。木登りが得意なハクビシと不得意なアナグマでは、対策が全く異なります。

また、野生獣による被害は、人が寝ている時間帯や人のいない場所で発生することが多く、被害量を把握するのが困難です。

センサーカメラの設置は、夜間や人の見ていないところで何が起きているのか、野生獣の種類や行動を確認するだけでなく、実施した対策の効果を確認することができるので、センサーカメラの活用はとても有意義です。

センサーカメラを設置する際には、設置の目的（獣種判定または行動調査なのか等）や、撮影距離と範囲（夜間は短くなります）、獣種に応じた設置の高さ、誤作動防止（カメラの前に植物は無い方が良いです）、防水対策（杭を打って設置すると、カメラは雨水で直接濡れることになり故障の要因となるため、樹木に固定するのが安心です）等を総合的に考慮して場所を決めます。



写真4 現地で使用中のセンサーカメラ

5 おわりに

3つの基本対策を同時に実施する総合対策の実施方法、簡易電気柵や恒久電気柵の設置方法や設置済みの電気柵の点検チェック、集落ごと電気柵で囲ってしまう方法、センサーカメラの利用方法など、野生獣被害対策についても、各農業改良普及センターでは支援を行っています。

次号は7月25日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 農薬散布時は、近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬は適切に保管・管理しましょう